

峯 陽 一 著

『現代アフリカと開発経済学』 ——市場経済の荒波のなかで——

日本評論社 1999年 iii + 304ページ

絵 所 秀 紀

I

本書は、2つの顕著な特色を備えている。ひとつは、アーサー・ルイス、アルバート・ハーシュマン、そしてアマルティア・センという開発経済学史の上で大きな影響力を行使してきた3人の思想とヴィジョンを中軸に据えて、現代アフリカの政治経済学を展開したことである。もうひとつは、「アフリカ人の経験から多くのことを学ぶことができる」(267ページ)というメッセージの強さである。いずれもわれわれの盲点をついた、いささか度肝を抜かれるユニークな視角である。しかし、この「ユニークさ」はまもなく本書を読み進むうちに溶け、説得的な議論となって結実している。

II

第1章「歴史への視座」は、古代から独立にいたるまでのアフリカ史を概観したイントロダクションである。植民地期以前におけるアフリカ世界の文明的な豊かさ、それとは対照的な16世紀から19世紀まで存続した大西洋奴隷貿易時代の悲惨なアフリカ、植民地支配下でのアフリカにおける民族形成の動きの特性、そして最後に20世紀初頭に産声をあげたアフリカの独立と統一をめざすパンアフリカニズム運動が紹介されている。

峯氏は、「専門的なアフリカ研究者にとっては、本章の叙述はあまりに基礎的なものだから、読み飛ばしていただいてもかまわない」(6ページ)と謙遜

しているが、しかしその中でも本書を貫く基本的なアフリカ認識が垣間見られる。すなわち、「広大な土地面積の割に人口が少ないアフリカ大陸では、種々の統治体は緩やかな交易網で結ばれてはいたものの、分立する各政治単位的意思決定を縛る制度的枠組みは成立しにくい傾向があった」(20ページ)という認識と、「アフリカ諸国の独立運動の中心的な担い手になったのは、欧米の大学で教育を受けた近代的エリート」であり、この「権力を目指したエリートたちは、19世紀の西ヨーロッパの経験に倣い、多様な集団の上位の構築物としての『国民国家』を絶対視する反面で、農村を基盤とする『部族』的な政治勢力は後進的で、分断的で、反動的な存在だと考える傾向があった」(25ページ)とする認識である。独立後アフリカの「悲劇」は、これら対抗する2つの要素——伝統社会の枠組みと西欧近代社会を規範とした国民国家という枠組み——のズレから生み出されたという構図である。現代アフリカ社会を被うこれら2つの要素の対抗とズレという視角は、近代と伝統、都市と農村、エリートと大衆、中央集権化と分権化等々さまざまな表現のヴァリエーションを伴いながら、本書を貫く縦糸となっている。

第2章「ルイス理論とアフリカ」は、アーサー・ルイスの、アフリカ研究者以外にはほとんど知られていないアフリカ論を紹介したものである。ルイスのノーベル経済学賞受賞作品「無制限労働供給の下での経済発展」は、その題のとおり、農村に過剰人口を抱えた発展途上国の経済発展モデルである。ところがアフリカは、この無制限労働供給を前提に組み立てられたモデルにはあてはまらない。おそらくそのためであろう、ルイスのアフリカ論は無制限労働供給モデルの影に隠れてしまって、われわれの目に見えにくくなっている。本章は、この隠されたルイスのアフリカ論を紹介したものである。

ルイスは、ンクルマ首相に招かれてガーナの経済顧問になった。しかしンクルマの推進する社会主義の開発路線は、ルイスの考えとは大きく異なるものであった。ルイスのアフリカ論はンクルマ政権批判をベースにしている。本章は評者にとってきわめて新鮮なものであり、触発されてルイスのアフリカ論

をいくつか読んでみた。そして今なおルイスのアフリカ論が決して過去のものではないこと、それどころかますます現代的な意義が増していることを確信するようになった。

ルイスは『西アフリカの政治』[Lewis 1965]で、西アフリカ諸国（ガーナ、ナイジェリア、コンゴ）では「単一政党制度」が支配的であり、これが政治的不安定の原因になっていること、しかしだからといって米英社会に根づいた「民主主義制度」を西アフリカ諸国にそのまま移植しても機能しないと断じた。その理由としてルイスは、西アフリカ諸国の社会は英米社会にみられる「階級社会」ではなく、エスニックな集団が水平的に分立する「複合社会」であるからだと論じた。そしてルイスは、アフリカで実現可能な政治制度として、「比例代表制、連立政治、および連邦制の組み合わせ」(p. 36)を提案した。もう一点峯氏が強調したのは、ルイスがアフリカ経済開発の担い手として最も重視していたのは「小農経済」であって、「小農経済の生産性を高める」ことこそがアフリカの未来を切り開く開発戦略であったという点である。

峯氏の議論を、少々補足しておきたい^(注1)。ルイスが一貫して主張したことは、経済発展の担い手は「人々」（すなわち民間部門）であって、「政府」あるいは政府による「開発計画」ではないという点である。1950年代から60年代前半にかけて支配的であった構造主義開発理論は、経済開発の担い手としての政府の役割を強調するものであった。ソ連型の計画経済体制を想定しながら定式化された、ヌルクセやローゼンシュタイン＝ロダンによって代表される考えである。ルイスが強調しているのは、ヌルクセやローゼンシュタイン＝ロダンによって定式化されたアイデアはアフリカには適用できないという点である。アフリカの政府は、「正直で効率的」でもないし、また「教育があり経営能力のある大規模な人的資源と資金を動員」することもできない。ルイスによると、アフリカの政治家たちは「近代化のプロセスのヒーローでもエージェントでもなく、単に近代化の利益享受者」であった。さらに、都市労働者と教育を受けたエリートは、「消費に対するあくな

き欲求をもち、なんら貯蓄することはなかった」。のみならず、アフリカには部族問題によって引き起こされた政治経済的な歪みがある。

ルイスの議論には、「政治家、エリート、都市労働者」に対する強い不信感がある。アフリカでは、部族政治による身内びいきが横行し、政府あるいは政治的指導者は果たすべき役割を担っていない。その結果、「アフリカ社会主義」の名の下に「農民」が犠牲にされているという考えである。

第3章「農村と都市の経済学」では、まずロバート・ベイツの「合理的選択」論が批判的に検討され、ついで「膨張するアフリカの都市」に目が向けられている。アフリカ都市労働市場の階層性、出稼ぎ労働の経済的意味が論じられたのちに、都市化と累積債務との密接な関係が論じられている。従来アフリカの都市化は農村を収奪しながら進展してきたが、近年その構図が崩れ始め、その結果外国からの資金供給（援助）に依存した都市化が進展し、これが累積債務の原因となっているという図式である。

本章を読みながら、かつて目にしたマイケル・リプトンの「都市偏向」(urban bias) 論を思い出した[Lipton 1977]。インド経済論を勉強している評者からみると、リプトンの議論はあまりにも単純でそれほど感心しなかった。しかし峯氏のアフリカ都市論を読んでいくうちに、リプトン仮説はアフリカにはよく妥当するのかもしれない考えるようになった。土着の地主階層が欠如していることが、アフリカの特色である。インド世界との大きな違いである。

第4章「越境するハーシュマン」も出色である。ハーシュマンというただれでも思い浮かべるのはラテン・アメリカ（コロンビア）との関係であるが、峯氏が語るのはハーシュマンのアフリカ論である。峯氏の指摘するように、ともかくもハーシュマンは「越境者」である。とてつもない教養をベースに据えて、既存概念にとらわれない独自の世界——徹底的に権威を嫌い、時には自らの過去にとらわれることも嫌う——を構築した鬼才である。周知のように数多くのきわめてユニークな分析概念を創り出した。あまりにもユニークすぎて、手に負えないところがある。峯氏は、まずハーシュマンが提案した開発プ

プロジェクト評価手法である「特性受容」と「特性形成」論を、ナイジェリアの鉄道事業の失敗例に即して紹介している。ついでかなりの思いを込めて、彼の「退出・告発」モデルを紹介している(注2)。「退出・告発」モデルは、次章で展開されるアフリカ論の分析枠組みとして重視されている。

第5章「開発と人間行動」は、ハーシュマンの「退出・告発」モデルの影響を受けて展開されたゴラン・ヒデーンの「情の経済」論の批判的な検討から始まっている。ヒデーンの研究は、タンザニアで展開されたウジャマー・モデルを論じたものである。ヒデーンの「情の経済」をめぐる論争等を紹介する中から、アフリカ社会における「平等主義」とそれが生み出す「嫉妬」の構造などが興味深く紹介されている。しかしこの章は、ハーシュマンの「退出・告発」モデルにとらわれすぎたために、やや議論の筋が見えにくくなっている。いささかハーシュマンの毒気にあてられた感がある。アフリカ社会を理解するにあたって、「退出・告発」モデルを分析の枠組みとして利用しなければならない必然性が、十分に感じられない。が、それはそれとして、本章後半で触れている「モザンビークの悲劇」は小品の傑作である。

第6章「アフリカの飢饉とセン」は、アマルティア・センのアフリカ論の紹介である。ハーシュマンとセンが相互に共感をもっているという興味尽きない事実が紹介されたのちに、センの「エンタイトルメント」と「ケイパビリティ」論を軸に据えたアフリカの飢饉論が検討されている。峯氏によるとセンから学ぶべきことは、「理念からの距離、すなわち異質性の程度によって対象社会を序列づけ」る見方に対する批判であり、「適者生存を強調する思考は、外的世界の側を積極的につくりかえようとする人間主体の努力から、私たちの関心をそらしてしまいかねない」(244ページ)という警鐘である。

III

ルイス、ハーシュマン、センを手がかりにした、実に骨太な開発の政治経済学(あるいは「開発研

究」)の展開である。これが本書の横糸を形成している。あらためて述べる必要がないかもしれないが、本書は「西欧世界が近代、革新、効率性、合理性を体現し、アフリカ世界は伝統、停滞、非効率性、非合理性を体現する」という「機械的二元論」(252ページ)に対する批判を目指したものであり、「人間の経済の多様性を承認するとともに、地方の複雑な現実のなかで、開発の当事者が問題解決能力を蓄積していくこと」、すなわち「市場経済を移植することはできても、ロイヤルティを移植することはできない。それは内部から育つものだからである」(262ページ)という点を主張したものである。「客観的な普遍性を求めてやまない経済学」に対する、批判の視点を求めた書物であるとも言えよう。

峯氏のセンスの良さは随所に窺われるが、そのセンスはいわゆるエコノミストのそれではない。しかし峯氏は、頭からエコノミストの方法を意味のないものとして排除しているわけではない。例えばロバート・ペイツの議論に対する周到な取り扱い、その好例である。そうであるとするならば、もう少し新古典派エコノミストのアフリカ研究にも言及してほしかったと思う。コリエーガニングのアフリカ経済研究の包括的なサーヴェイ論文をみると、「信頼」という社会資本の欠如がアフリカの特性であることが指摘されている[Collier and Gunning 1999]。案外、地域研究者とエコノミストの距離は近いのかもしれない。同じ理由で、ピーター・パウアーの西アフリカ論にも言及してほしかった[Bauer 1954]。また峯氏が指摘するように、アフリカ研究者のペイツに対する批判が彼の採用した「合理的選択という仮説に集中し」(92ページ)、対照的にヒデーンの展開した「情けの経済」論が「アフリカ研究者のあいだで大きな注目を集めた」(165~166ページ)とするならば、これはエコノミストと地域研究者との間の「不幸な分裂」を示す一事例である。はたして本当に、「西アフリカの Cocoa 農民が、自分が住んでもいない故郷に立派な家を建てようとするのはなぜか。ザンビアの貧農の女性たちが、何の報酬も受け取れないのに近所の畑を喜んで耕作するのはなぜか。このような事例に、合理的選択理論はほとんど何の

説明も与えない」(92～93ページ)のであろうか。こうした事例は、与えられた環境制約あるいは不完全情報制約の下での合理的選択の結果として理解することはできないのであろうか。しばしば人々の価値観(情け)は移ろいやすく、もろい。エコノミストと地域研究者との間でのギリギリの線での対話が必要となろう(注3)。

IV

本書を読み終えて、あらためてアフリカの発展にとって何が必要なのかと考えざるをえなかった。英米社会で発達した「民主主義制度」の機械的な移植に対するルイスの疑念は、現在ますます強まっている。昨今流行の「グッド・ガバナンス」論がどことなくうつろな議論に響くのも、アフリカの実態を無視したものになっているからである。つまるところ、いまなおわれわれが描きうるアフリカの発展の構図は、ルイスの枠組みからそれほど進んでいるわけではないように思われる(注4)。アフリカ研究の課題のひとつは、依然として米英型民主主義制度がアフリカに容易に根づかない社会的な要因をみつけだすことであろう。

またコリエー＝ガニングの主張するようにアフリカには社会資本が欠如しているのだとすれば、どうすれば人々の間に「信頼」をつくりだすようなシステムを創り出すことができるのかが、アフリカ研究の主要テーマのひとつとなろう。「政府か市場か」という二分法の中に解答がないことは自明である。人々の間に「信頼」が形成されないならば、「市場」も機能しないし、「政府」も機能しないからである。機能する経済システムを形成するためには、アフリカ伝統社会の中で培われてきた「信頼」のありかたを確認し、それを育てていくことが、迂遠なように見えて実は最も確実な方法ではなからうか。

そして最後になったが、これまたルイスが強調し、峯氏が注意を喚起したように、「サヘル地域などの乾燥地帯では十分な水が得られず、肥料や高収量品種を投入しても生産性が改善しない」という「開発に対する最大の挑戦」(62ページ)に対して、知恵

をしぼることが求められていると言えよう。

(注1) 以下のルイスの議論は、Lewis (1969)にもとづいたものである。峯氏はルイスの議論をかなり網羅的に参照しているが、本書には触れていない。

(注2) 「退出・告発」モデルとは、ハーシュマンが『退出・告発そして忠誠』[Hirschman 1970]で展開したモデルである。個人・各種組織・企業には、合理的で効率的な行動からのさまざまな逸脱がみられる。退出と告発とは、こうした逸脱を正す際に用いられる2つの選択パターンである。伝統的に前者は経済学の領域で、後者は政治学の領域で重視されてきた概念であるが、ハーシュマンは両者を統合的にとらえることによって新しい「政治経済学」の領域を切り開いた。

(注3) まちがいなくこの点において、峯氏の興味をそそでであろう議論はアカロフのそれである。とくに、Akerlof (1973), Akerlof (1982)を参照されたい(両論文ともに、Akerlof (1984)に所収)。

(注4) 「従来の一枚岩的な統治体制を地域分権化・連邦制によって民主化する」というアフリカ研究者勝俣誠の提案は、ルイスの「複合社会に適合的な分権的民主主義」体制の形成というアイデアと同型である。勝俣は、「部族主義という負の評価のもとで、ともすると無視ないし軽蔑されてきた、各エスニック集団内および集団間で育まれてきた血縁・地縁による内生的社会関係を、ただちに否定したり、排除したり」するのではなく、「むしろこうした多様な同族・同郷意識を、今日のアフリカの政治システムの危機の中で現実のものとしていく」こと、すなわち「民族(部族)の多様性を政治的に調整できる多民族ないし多部族型統治」への展望を探ることが現実的であり、望ましくもあると論じている[勝俣 1991, 87]。峯氏もこうした見解を支持しているものと推測される。

文献リスト

<日本語文献>

勝俣 誠 1991.『現代アフリカ入門』岩波新書。

<英語文献>

Akerlof, George A. 1973. "Loyalty Filters." *American Economic Review* 73 (March).

——1982. "Labor Contracts as Partial Gift Exchange." *The Quarterly Journal of Economics* 97 (November).

- 1984. *An Economic Theorist's Book of Tales*. New York: Cambridge University Press.
- Bauer, P. T. 1954. *West African Trade: A Study of Competition, Oligopoly and Monopoly in a Changing Economy*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Collier, Paul and Jan Willem Gunning 1999. "Explaining African Economic Performance," *Journal of Economic Literature* 37 (March).
- Hirschman, Albert O. 1970. *Exit, Voice, and Loyalty: Responses to Decline in Firms, Organizations, and States*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- Lewis, Arthur 1965. *Politics in West Africa*. London: George Allen & Unwin.
- 1969. *Some Aspects of Economic Development*. Tema: University of Ghana, Ghana Publishing Corporation.
- Lipton, Michael 1977. *Why Poor People Stay Poor: Urban Bias in World Development*. London: Temple Smith.

(法政大学経済学部教授)